

裁判員制度を中心とした地域司法の諸課題に関する 教育・研究プロジェクト

平 野 潔¹

は じ め に

2009年5月21日にスタートした裁判員制度は、2019年に施行10周年を迎えた。制度が施行された2009年から始まった弘前大学における裁判員制度に関する様々な取り組みも、10周年を迎えることになった。

今年度のプロジェクトも、これまでのプロジェクトと同様、裁判員制度中心に置きつつ地域司法の課題を教育・研究の両面から考えていこうとするもので、専修大学法学部の飯考行氏、北里大学教職課程の宮崎秀一氏、弘前大学人文社会科学部の成田史子氏、河合正雄氏、平野が共同して実施してきたものである。詳細な報告は後日行うこととして、ここでは、本プロジェクトの概要のみを示していきたい²。

1. 背景と目的

前述したように、今年度は、裁判員制度施行が施行されて10年になるため、この10年の青森県の裁判員裁判を総括することを中心に据えつつ、裁判員制度を中心とした地域司法の諸課題に関して、教育・研究を推し進め、その成果を地域に還元することを目的として、本プロジェクトは計画された。研究・教育それぞれの面について本プロジェクトの目的を示しておきたい。

最初に研究面であるが、10周年を迎えた裁判員制度は、まだまだ様々な問題を抱えている。そして、その問題の中には青森県特有の問題も含まれている。そこで、10周年の節目の年に当たり、現在の裁判員制度の課題を、青森県を中心に検証することを試みた。その成果を報告し、地域に還元する場としてのシンポジウムは、「青森県の裁判員裁判—これまでの10年間を振り返る」と題して開催された。

続いて教育面であるが、今年度も引き続き学生の提案の企画を軸にしつつ、裁判員裁判傍聴や施設見学なども踏まえながら調査活動等を行うことを計画した。この活動を通じて、学生の司法への関心を高めるとともに、具体的な解決策を模索できるような人材を育成することを目的とした教育プロジェクトとした。

今年度の活動の内容も多岐に渡っているが、このうち「裁判員経験者インタビュー」「施設訪問・見学」「シンポジウム」について、それぞれの内容を簡単に説明する。

¹ 弘前大学人文社会科学部

² 例年通り、活動の詳細は、2020年3月発刊予定の報告書において紹介する予定である。なお、これまでの活動の詳細は、平野潔編『青森県の裁判員裁判と司法関係機関の姿—弘大生による調査報告—』（2015年）、同編『弘大生による裁判員制度と司法関係機関に関する報告書』（2016年）、同編『弘大生から見た青森県の司法および司法関係機関—裁判員制度・更生保護・司法アクセス—』（2017年）、同編『青森県を中心とした司法関連制度の現状—被害者支援・司法制度・裁判員制度—』（2018年）、同編『青森県の地域司法と支える人たち—裁判員裁判・司法制度・更生保護—』（2019年）を参照。

2. 実 施 内 容

(1) 裁判員経験者インタビュー

一昨年度、昨年度と新たな裁判員経験者へのインタビューは行えなかったが、今年度は1名ではあるが、新しい経験をお話いただくことができた。インタビューに応じてくださったのは、青森県 87 例目の裁判員裁判の補充裁判員を務めた西澤雅子氏であった。西澤氏は、昨年度のシンポジウムを告知する「広報ひろさき」を見てご協力くださることになり、昨年度のシンポジウムにも参加していただいていた。

今回は7名の学生が参加したが、ほとんどが裁判員経験者インタビューに初めて参加した学生であった。これまで通り、学生は過去の新聞記事等で裁判員経験者が担当された裁判員裁判についての情報を収集し、質問項目を作成して事前に郵送した。

当日は、約2時間に渡るインタビューであったが、非常に丁寧にご回答いただき、学生にとってはいい勉強の機会になったように思われる。

(2) 施設見学・訪問

今年度は、2019年10月28日(月)に施設見学を実施した。訪問先は、昨年度と同様に、国立療養所松丘保養園と青森刑務所であった。

国立療養所松丘保養園では、自治会の副会長にご自身の体験談をお話いただき、昨年度に続いて川西健登園長からもお話をいただいた。学生の関心が高かったようで、質疑応答の時間も学生から積極的に質問が出ていた。その後、園内を案内していただきながら見学した。

青森刑務所では、所長から近時大きな課題となっている再犯防止の取り組みを交えながら、青森刑務所の概要に関する説明をしていただいた。その後、所長の案内で刑務所内の見学をさせていただいた。見学を踏まえて補充の説明と質疑応答が行われた。所長が弘前大学の卒業生だったこともあって、非常に熱心に説明をしていただくことができた。

また、施設見学とは別に、経済法律コースの専門科目である「地域司法実習」の一環として、3つの施設を訪問しお話を伺っている。12月20日(金)には、子どもの貧困に関する青森県の施策についてお話を伺うために青森県健康福祉部こどもみらい課を訪問し、12月23日(月)には、少年司法における少年鑑別所の役割と、地域における法務少年支援センターの活動についてお話を伺うために青森少年鑑別所を訪問し、12月25日(水)には、更生保護における被害者支援についてお話を伺うために青森保護観察所を訪問した。

(3) シンポジウム

今年度のシンポジウムは、2019年11月3日(日)に、弘前大学人文社会科学部多目的ホールで行われた。テーマは、「青森県の裁判員裁判—これまでの10年を振り返る」であり、これは、2014年に「青森県の裁判員裁判—これまでの5年を振り返る」というテーマでシンポジウムを行ったことに倣い、この10年を青森県の裁判員裁判を中心に振り返り、その成果と今後の課題、展望を考えていこうとするものであった。

第1部は、「裁判員裁判10年の成果と課題」とする報告であった。まず平野から、青森県の裁判員裁判の運用状況に関する分析結果の報告をおこない、続いて、宮崎秀一氏(北里大学教職課程)より、裁判員制度を法教育の中でどのように位置づけるかに関する現状と課題の報告があった。この報告を受けて、研究・実務両



第1部で報告する宮崎氏

面から裁判員制度の課題と展望が示された。まず研究者の視点から飯考行氏（専修大学法学部）に、続いて実務家の視点から古玉正紀氏（青森地方裁判所）にそれぞれご報告いただいた。

第2部は、「裁判員経験者が感じた裁判員裁判」として、裁判員経験者3名の方にご登壇いただき、裁判員の経験を自由にお話いただいた。シンポジウムのパネルディスカッションでは時間的な制約もあって十分に語り尽くせない部分があり、また、例年のアンケートでも「もう少し経験者のお話が聞きたかった」という要望があったので、今回はこのような形で第2部を用意した。ご登壇いただいたのは、青森県1例目の裁判員裁判の経験者である湊谷友光氏、46例目の裁判員裁判の経験者である太田淳也氏、そして87例目の西澤雅子氏であった。進行役は、平野が務めた。他に、当日出席できなかったがコメントをお寄せいただいた経験者の方もいた。3名の方それぞれから貴重なお話を伺うことができた。

第3部はパネルディスカッションであった。コーディネーターは飯氏にお願いし、実務家として、裁判官の古玉氏、検察官の吉武恵美子氏（青森地方検察庁）、弁護士の竹本真紀氏（青森県弁護士会）、裁判員経験者として、第2部にご登壇いただいた3名の方、そして、社会科の授業の中で裁判員制度に関する教育を積極的に行っている工藤和洋氏（黒石市立中郷中学校）、2年次から本プロジェクトに参加し、裁判傍聴や施設見学、裁判員経験者インタビューなどに関わってきた佐藤朱莉さん（弘前大学人文社会科学部4年）にパネリストとしてご登壇いただいた。パネルディスカッションでは、10年を振り返っての思いや、次の10年に向けた課題などが議論された。さらに、パネルディスカッションの後半では、質疑応答の時間も設けられ、活発な意見交換が行われた。

弘前大学で裁判員制度関連のシンポジウムを開催したのは、制度が施行された2009年であり、今回が12回目の開催となった。10周年の節目の年を飾るに相応しい充実したシンポジウムとなったように思う。

おわりに

今年度もシンポジウムの登壇者や司法関連機関の協力を得て、制度施行10周年の年に充実したプロジェクトを行うことができた。とりわけシンポジウムでは、この10年間を一度振り返り、これまでの成果のまとめと今後の課題を提示することができたのではないかと考えている。



第1部で報告する飯氏



第1部で報告する古玉氏



第2部の様子



第3部のパネルディスカッション

市民と法曹三者 課題探る



裁判員10年 弘大でシンポ

弘大（弘前大学）は10月31日、市民と法曹三者の課題を探るシンポジウムを開催した。市民と法曹の両方から、裁判員制度の課題や今後の展望について話し合った。

当日は、市民と法曹の両方から、裁判員制度の課題や今後の展望について話し合った。市民と法曹の両方から、裁判員制度の課題や今後の展望について話し合った。

「市民と法曹の両方から、裁判員制度の課題や今後の展望について話し合った。」

「市民と法曹の両方から、裁判員制度の課題や今後の展望について話し合った。」

「市民と法曹の両方から、裁判員制度の課題や今後の展望について話し合った。」

この画像は当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです。転載は固くお断りします。

裁判員裁判次の10年は

弘大で、経験者らに方議論
裁判員裁判制度の施行から10年を振り返り、野澤教授らが10年の課題や成果を議論。第2部は、市民と法曹の両方から、裁判員制度の課題や今後の展望について話し合った。



裁判員裁判制度が施行されてからの10年を振り返ったシンポジウム

「市民と法曹の両方から、裁判員制度の課題や今後の展望について話し合った。」

「市民と法曹の両方から、裁判員制度の課題や今後の展望について話し合った。」

「市民と法曹の両方から、裁判員制度の課題や今後の展望について話し合った。」

この画像は当該ページに限って陸奥新報社が利用を許諾したものです。転載は固くお断りします。